

今回は、弥生時代の後にやって来た「古墳時代」についてお話ししたいと思います。

古墳とは、土を盛ったり地面を削ったりして造った大きな墓のことで、円墳や前方後円墳など様々な形が知られています。古墳造りには高度な土木技術と大変な労力がかかるため、一般庶民ではなく支配者をはじめとした有力者層の墓と考えられます。この古墳造りが流行った時代を文字どおり古墳時代(おおよそ3世紀後半～7世紀末)と呼びます。片上地区周辺の山々にはこのような古墳が70余りあり、古墳時代の終わりごろまで造られています。なかでも乙坂今北町にある今北山古墳(全長76m)は丹南地域最大の前方後円墳で、そこに葬られている人物はヤマト王権を支える勢力として当地を拠所とした首長であったことが想定されます。近年の様々な考古学的成果からも、当地を含む北陸南西部が古墳時代の初めごろから近畿地方の影響を強く受ける地域へと変容していったことが知られ、弥生時代の後半に列島各地で花開いた地域文化(コシ、チクシ、キビ、タニワ、イズモなど)が次第に解体していった時代でもありました。

庶民は厳しい階級性社会に身を置くことになりますが、農業生産性の向上により弥生時代より幾分か安定した生活を送ることが可能になったものと推測されます。この時代は大陸との往来が頻繁になり様々な文化・技術(漢字や仏教が知られています)が伝わった時代でもあり、現代の日本文化の基礎がようやく出来つつあった時代でした。

文化課 深川義之

